

松原を次の世代へ



江戸時代

上級藩士の屋敷や公的機関が並ぶ格式の高い地区。弘道館が置かれ、次世代の佐賀を担う青少年の声に溢れ、日峯社を核に佐賀の人々が集い、祭りの場にもなった。

明治～終戦

「佐賀丸の内」と称された佐賀市役所などの官公庁群と、直正公銅像を核とした銅像園に図書館・徴古館、佐嘉神社が次々とでき、県内随一の歴史文化ゾーンとなった。

昭和(戦後)

行政や歴史文化の各施設は城内をはじめ各地へ移転。中央大通りの延伸により佐賀駅・市街地と城内が直線の道路で結ばれた。

平成・令和

徴古館の再開、松原公園や松原川の整備など、既存の施設や環境が再活用されるとともに、バルーンミュージアムやNHK佐賀放送局の新放送会館の開館、ARKSの整備など新たな賑わいが創出される。



今変わらず、佐賀のまちは、北の山と南の海の間位置しています。北の山を源とする清流は多布施川を通じて城下を潤し、松原川の流路は今も昔も変わりません。江戸時代の北御堀端小路をもとに貫通道路(国道264号)が拡幅されたように、江戸時代の先人たちが築いた水と道のシステムは今も引き継がれています。

変わらない松原の地で、先人たちは何を目指し、何を営んできたのでしょうか…。そして、その営みによりこの地に蓄積された「松原らしさ」とは…。

松原という地名は、龍造寺氏時代の痕跡として江戸時代を通じて保存されたと考えられる「松原」(土手)に由来します。先人の足跡を保存し次世代に伝えることが、地名の由来となっているのです。

龍造寺・鍋島両家を祀るお宮は、今も佐賀の人たちが願いを届け、安らげる空間として鎮座し、境内を囲む松原川は、「水のまち佐賀城下」の中で清流の川べりを歩ける数少ない場所として、楠の古木とともにまちに落ち着きを与えています。

城下で佐賀の先人を祀るお宮はここにしかありません。そのお宮のもつ歴史性や包容性が、銅像・図書館・徴古館・公会堂などの施設を呼び込み、県内随一の官公庁群と文化施設群が建ち並び、行政と歴史文化をリードしたのが近代の松原でした。

つまり、松原らしさとは、佐賀らしさと言い換えることもできるでしょう。かつて弘道館が交通の利点から松原に設置されたように、今も東西を貫く国道と南北に走る中央大通りが交わり合う結節点であり、佐賀駅周辺と城内をつなぐエリアとなっています。

人が通い合い、集い、歴史と安らぎに包まれるという、唯一無二の松原らしさを次の世代に伝えていきたいものです。